

モラルという言葉の最近の展開をめぐって

御法川 誠次郎

目次

- 一 新たなモラルの希求
- 二 モラル・インテリジェンス——第三の知性
- 三 お仕着せのモラルから、身につくモラルへの提案
- 四 四つものさし
- 五 モラル・ハラスメント——人を傷つけずにはいられない
- 六 意味の違うモラルという言葉
- 七 気づかれづらいハラスメント
- 八 ハラスメントへの対応
- 九 モラルの再生のために

一 新たなモラルの希求

最近、モラルという言葉が今まではひと味違うニュアンスで取り扱っている本が出版されている。ここでは、そのいくつかの使い方の中から二つを取り上げ、これからのモラルについて考えてみよう。

現代の日本では、教条的に押し付けられるというイメージが伴っているために、モラルを嫌っている人が多い

ようだ。しかし、その多くは、モラルを嫌ってはいらぬのだけれども、モラルを不必要なものだとは考えてはいない。モラルは必要だとは思わが嫌いだという、切り裂かれた状況に陥っていて、その出口が見つからないという閉鎖性が、モラルを考へること自体を遠ざけさせているのではないだろうか。

年代をさかのぼってみると、日本は儒教の教えの影響を強く受けて、縦の秩序を確立した社会を長く続けてきた。ところが、二十世紀半ばの第二次世界大戦での敗北を契機に、民主主義を取り入れるという根本的な社会構造の変革を行なった。敗戦によるショックもあり、それまでの価値観を否定したため、拠り所を失い、自信を失った。それまでの縦社会の道徳や上から押し付けるものに対する拒否感が、モラルへのアレルギーへとつながった。そのために、モラルを否定しようと反発したり、社会への敵意を反社会的な行動として表現したりするということが見られた。と、表面的に述べると、もう五〇年以上も前の出来事が、現在にも如実に影響を示しているかのようである。

しかし、もう少し長いスパンで歴史を見るならば、その表面的な理由の裏に、本質的な問題が横たわっていることが明らかになる。すなわち、中世までの狭い社会であるがゆえに固定的な価値観で安定していた時代から、より多くの人たちと共存し、より多様化した生き方を認め合う、グローバルで流動的な社会である現代へと時代は移行した。そのため、それまでのモラルでは対応しきれなくなってきたのだ。それが本質的な問題であることは、モラルへの反発が日本だけではなく、先進諸国に共通して見られる現象だということからも明らかである。さらには、社会構造を変化させているいずれの国においても、大なり小なり、同じような問題を抱えていることからもうかがえる。

社会は、時代とともに変化していく。その変化とは、それまでの秩序を壊すことから生まれてきたものなのである。ところが、モラルとはその秩序を守る働きをしていたわけで、そのモラルが以前のままでありながら、変革された社会の中で以前と同じように機能するのは基本的に難しいものがある。新しい社会を切り開いてきたアメリカ合衆国を筆頭に、モラルの喪失と考へられるような現象が多発している。先進諸国を始め、それまでの社会構造を変化させている各国は、新たな社会に対応し、その新たな社会を安定させることのできるモラル・システムを捜し求めている。それが、今までのモラルに変わる、新たなモラルの希求という動きにもなっている。

残念ながら、そのための切り札は今のところできていないし、これからはできないのではないだろうか。変動していく社会に対応できるモラルとは、社会の変動に応じて変化していくモラルということになる。そのようなモラルは考へ難いのではないだろうか。繰り返しになるが、今までのモラルとは、社会の秩序を保持するために、社会の枠を超えることを否定するものであった。そのため、どうしてもその社会の中で権力を持っている者にとって優利な側面を持っているわけで、そのために権威によってモラルを守らせるといふ側面が付随してきていた。現在の社会を維持・安定させることが、モラルの価値として認められていたわけである。

それに対し、その今までのモラルの枠を緩めたり否定することで、新しい社会は切り開かれてきたのである。極端に言うと、社会の進展とモラルとは相容れない性格を持っているといえよう。そのような今までのモラルの性格を一変させて、社会を変化させていく力を持ったモラルというのが本当に現出可能なのだろうか。もし、社会を変化させ、その社会の変化に対応して自らも変化していくモラルというのが存在可能だとしたら、その変化していくモラルとは、基準をどこにおいたものなのだろうか。考へられる可能性のひとつに、社会の成員一人ひとりの心の中にある自立的なモラルということがある。しかし、その基準は、個人に委ねられているわけであるから、相対的なモラルになる危険性を持っていることになる。相対的なものになった場合、それがモラルと

言えるのかどうかすら問題になるのではなからうか。

そのような難しい時代状況の中で、しかし、モラルの必要性はいっそう高まっている。そのような状況であるがゆえに、今までとは異なったモラルということばの使い方が出てくるのは必然的なのであろう。

二 モラル・インテリジェンス——第三の知性

新たな社会を切り開いてきたアメリカ合衆国は、クリントン大統領のもとで、モラルの復興を教育界の課題として取り組んだ。まずは、そのアメリカ合衆国からの発言である。

社会からモラルの力が減退してきたと指摘されてきて久しいが、その後が続いたのは、子どもものモラルの低下だった。凶暴な事件の低年齢化、飲酒、麻薬の常用、低年齢のセックス、カンニング、嘘、万引きなど、児童や青少年の問題行動が多発している状況だ。これらをモラルの欠如によるものとみなし、モラルの復興が急務とされたのである。その中から出てきた言葉が、「モラル・インテリジェンス」である。アーロン・ハスは、その著書『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第三の能力』の中で、知性について画期的な考えを提示している。

これまで知性とは、知力にかかわるさまざまな要素で成り立つものと思われてきた。つまり知的な人間とは、知識をある程度身につけて、特に知的な技能にすぐれていて、抽象的な概念を理解でき、それを言葉できちんと表現できる人だと思われてきた。ところが最近になって、知性に第二の領域があることが分かった

——感情の知性である。何かをやり遂げるにあたって、もちろん知的な能力は必要だが、同時に感情の知性

も欠かせないことが、数々のデータから浮かび上がってきた。

さらに知性には、私たち一人ひとりの幸せを大きく左右する第三の領域もあるといっている。しかもこの知性は個人を育てるだけでなく、社会に安定をもたらしてくれる。その領域とは、モラルの知性⁽¹⁾だ。

知性については、これまでの長い間、狭い意味での知性が考えられてきた。それは、知性と感情と対比して使われるように、人間の能力の一部だけをさすものという位置づけであった。しかし、その知性で考えられたとおりにならない現実、特に人間関係にかかわるときの知性の限界というものを認識したときに、感情という人間の働きを含めて考えることの必要性が訴えられた。いわゆるEQ(Emotional Intelligence: 感情の知性)への注目ということであり、『EQ——心の知能指数』という本の出版を期に注目を浴びるようになった。その流れを踏まえて、アーロン・ハスは、さらに第三の知性を訴えるのだ。

知性と感情というのは、人間の能力の中心である。その能力を人間関係においてどのように発揮させるかというときにモラルが働く。そのモラルを考えると、モラルの内容・妥当性についての論点もあれば、そのモラルをどのように伝えていくかという教育的な論点もある。モラル・インテリジェンスというのは、社会的な観点から与えられた価値としてモラルを考えるのではなく、個人の心の中に能力として持っているものだ。いわゆる、良心といわれていたものと内容的にオーバーラップするものと考えられるが、人間には持って生まれ、他人に対する愛、慈しみの心があると、心理臨床家としての人間観察から述べている。そして、その心をどのように育ていくかということに注目しているのだ。

三 お仕着せのモラルから、身につくモラルへの提案

モラル・インテリジェンスという言葉の裏には、私たち一人ひとりが頭を働かせて心の能力をフルに生かした判断をしていかなければならないという含みがある。すでに与えられた価値としてのモラルとか、一時の感情によるものであるならば、現在のように変化している社会では有効なモラルにはなり得ない。

モラルある行動をとるには、まず状況を分析して理解し、相手に共感する必要がある。^③

モラルの根底には共感がある。それ故に、共感力を育てることがポイントである。共感力を育てるためには、子どものときから、他人の立場に立つて考えられるように配慮していく必要がある。物事を違う目で見られるようになること、子どもが想像力を最大限に働かせて考える習性を育てていくことが大切である。そのためには、自分で考えざるをえないような質問をたくさんすることによって、子供の能力は培われていく。決して、規則を持ち出してモラルを一方的に教えないことだ。自分の行動が他人の感情にどのような影響を与えるのかをわからせることが重要なのだ。残念なことに、親や大人は、子どもが身勝手な行動や薄情な行動をとったときや言いつけを守らなかったときに、怒鳴ったり叱ってしまいがちである。そんな行動をとってしまう大人の心を、心理学者であるアロン・ハスは次のように分析している。

このように痲癩を起こすのは、ひとつには子どもが反抗したと思いい、それを自分へのあてつけととるからだ(だから「どつちが偉いか教えてやる」とばかりに、わめき散らしてしまふ)。親はつい二度三度と説教を繰り返しては、効き目がなと思うてよけいに騒ぎ立てて、やけになって叱りどばしたり、「わからせてやる」と思っで懲らしめる。^④

これはモラルを教えているのではない。モラルへの反発を教えていることになる。もちろん、子どもはそのときは、圧倒的な力の差を感じて、親の言うことに表面的には従うことを覚えるかもしれない。しかし、親が行なっているのは、子どもに服従することを教えようとしているに過ぎず、子どもを支配しているだけである。その結果、親に対する反発、モラルに対しての反発を子どもの中の心の中に作り上げているのだ。これでは、教えるものがないに素晴らしい内容のモラルであっても、感情的なレベルでの反発を生み出しているだけで、そのモラルの価値が受け継がれることはないであろう。

多分に、このような過ちを犯してきたのが、日本のモラルの教育ではないかと思われる。モラルのベースには共感が必要なのである。その共感とは、強制して身につけさせることができるであろうか。強制されたところからは、共感は決して生まれない。共感は、理解されることからしか生まれない。押し付けではなく、共に考えていくときに、共感が芽生えていくのだ。共感は、共感を伝えようとしている者に共感された、という体験を通して伝わっていくのではないだろうか。

四 四つのものさし

さて、共感に基づいて、モラルの心が成長し始めたときに、それが適正なものであるかどうかを判断する尺度

が必要になる。アーロン・ハスは、モラル・インテリジェンスには、モラルに基づいて行動する能力と判断する能力の二つがあるという。何がモラルなのかを判断できなければならぬし、その判断ができて行動に移せる勇気がなければならぬ。そして次がモラルの中味についてである。そのモラルの高さを測るものさしとして、「公平さ」、「義務感または他人に対する責任感」、「誇り」、「自制心」の四つが上げられている。それらは、特定の宗教や文化に縛られるものではなく、世界各国に共通するものとして考えられるという。以下、そのさわりをみてみよう。

公平さとは、状況の変化によって変化していくものである。自分にも他人にも公平な条件とは何かということをつねに追求していく必要がある。

モラルの知性の高い人は、他人に対して感じる責任を自分に課せられた義務と考えて、こころよく引き受ける。自分だけではなく、他人にも気遣うべきだと心得ているからだ。

第三の誇りは、自尊心を意味しているのではない。自分だけでなく、どうしたら相手の誇りも高められるかと心を砕くことだ。

モラルの知性の高い人は、文化の違いを超えて、自制心を働かせていることが、これまでの研究でわかった。自制心を働かせるのは、身を滅ぼしかねない激しい感情が自分の心の中に潜んでいると知っているからだ。

ざっとみてもわかるように、アーロン・ハスが考えているモラルとは固定した形式をもつものではない。刻々と変化する状況の中で、お互いが満足できる状態を実現するためには、どのような尺度を持って考えていったらよいかという提案なのである。どれだけ深く状況を分析できるか、四つのものさしに基づいて、自分と相手が満足できる答えを導き出すことができるかという、「考える能力」のことである。まさに、モラルに関する「知性」といえる。

それ故に、モラル・インテリジェンスは、自然に身につくとは限らない。能力であるからには、訓練すれば、その能力はある程度高めることができる。モラル・インテリジェンスを高めるためには、心を訓練する必要があるのだ。その訓練とは、さまざまなモラルのジレンマについて、さまざまな角度から考えるということである。私たちの身の回りには、日々、どうしたらいいのだろうかと考えられる状況が生まれている。その一つひとつに、丁寧に付きあっていくこと、もっと違った角度から考えてみるという癖をつけることが大切であろう。

その訓練のきっかけのために、『モラル・インテリジェンス』という本の第二部には、さまざまなモラル・ジレンマのシナリオが載せられている。ぜひ、これらのシナリオを手がかりに、さまざまな立場から考える癖をつけ、モラル・インテリジェンスを高めてはいかがであろうか。

五 モラル・ハラスメント——人を傷つけずにはいられない

次に取り上げたいのは、『モラル・ハラスメント——人を傷つけずにはいられない』というかなり過激なタイトルの本である。人を傷つけずにはいられない、と自分の心の衝動を感じた人はいるだろうか。自分の行動を振り返ってみて、あのかときはそんな気持ちだったと感じて、あとで肝を冷やしたことがある人はいるだろうか。

今世紀屈指の神学者であるアブラハム・ヨシユア・ヘルシエル教授がある大学で講演したとき、学部生が

宗教は必要なのではないかと質問した。学生は、「私はよい人間ですし、他の人には礼儀正しくしているし、誠実でモラルにかなう生き方をしている。そんな私に、宗教は何をしてくれるのですか」と聞いた。ヘルシエル教授は、「そこですよ、あなたと私の違いは、あなたは、よい人間だ。でも、私は違う」と答えたという。

人間の心の中に、醜いものが全くないという人は考え難い。自分の中の悪意、嫉妬、恨み、醜さを自覚した人こそが、それらの気持ちに振り回されることなく、それらの気持ちを周りの人たちに撒き散らすことをしないのではないだろうか。

そんな自分の心の中に存在している悪意に目を向けていくことによって、自分をコントロールしていける人間性を培うことの大切さを感じる。しかし、この世の中には、自分の悪意を病的に現してしまう人もいるのだという現実を知らせてくれる、タイトル同様に怖いのがこの本なのである。

病的というのは、自分の悪意を、自分が意識できていないのではないかと考えられるからである。たいていの人間は、人を傷つけるようなことをしたり、嘘をついたときに、「これはいけないことだ」という意識を大なり小なり持つものだ。それだから、表面はいくら誤魔化したつもりでも、生理的なレベルでは汗をかいていたり、呼吸が速くなったりなどの変化が見られる。その反応に着目したのが、いわゆる「嘘発見器」というわけである。

しかし、中には罪の意識を感じないために、生理的な変化を示さない人がいるようだ。ここでいう「病的な人」とは、生理的な変化はどうなっているのかは定かではないが、一般の人とは異なり、罪の意識を感じないでさまざまな悪意に満ちた行動を起こしている人のことをさしている。今までの人間理解では理解し難い、そのような

病的な人が近年増えているというのである。

六 意味の違うモラルという言葉

ところで、本書の興味に入っていく前に確認しておかなければならないのが本書のタイトルである。タイトルは「モラル・ハラスメント」となっているが、ここで使われているモラルとは、道徳ではなく、精神という意味なのである。英語でモラルといえば、最初に道徳という意味が思い浮かぶが、この本の著者、マリー＝フランス・イルゴイエヌはフランス人である。フランス語の辞書でモラルをひくと、最初に男性名詞の「精神」という訳が出てくる。そしてさらに見ていくと、女性名詞の「道徳」という言葉が出てくる。本書で使われているモラルとは「精神」という語であり、モラル・ハラスメントとは、直訳すれば「精神的な嫌がらせ」ということになる。しかも、著者は、この本の中では、「嫌がらせ」よりも強烈な「精神的暴力」あるいは「精神的虐待」くらいの意味をもたせて「モラル・ハラスメント」という言葉を使っている。

ところが、日本語の訳書のタイトルは『モラル・ハラスメント』となっている。日本において「モラル」といえば道徳というイメージが定着している。そういう意味では、混乱を感じさせるものであり、その責任を追究する必要がある。しかし、本書の内容は、一見したところでは虐待とは思えないのだが、実際にはものごい虐待であるという精神的な暴力、表面の取り繕いの裏で実際に行なわれていることの酷さを白日のもとにさらそうとしている。表面の繕いとその裏に潜んだ精神の暴力という構図を示そうという意図が「モラル・ハラスメント」という言葉をそのまま使うことを選ばせたのであろう。また、本書の全体を通して感じさせる「あやうさ」は、道徳と精神の密接な関係をも象徴しているようにも感じさせる。そういう点では、「モラル・ハラスメント」とい

う言葉をもそのまま日本語訳書のタイトルにした意図はわかるような気もしてくる。しかし、日本で定着しているモラルという言葉とは違う意味を使用し、混乱させていることは大きな問題だと言わざるを得ない。

七 気づかれづらいハラスメント

さて、耳慣れない「モラル・ハラスメント」という言葉ではあるが、その実態はごく日常で見聞きしているものである。あまりによく見かけることなので、それが当たり前のことなのかと思ってしまうくらいであるから、それがモラル・ハラスメントであると気がつかないことが最大の問題なのだ。モラル・ハラスメントは人を人と思わず、嘘をついたり、相手を操ろうとすることから始まる。

本書では、特に身近に、そして陰湿に行なわれている代表的な場として、家庭と職場という二つを取り上げて具体的な例をたくさん挙げて述べている。

夫婦間でのモラル・ハラスメントは巧妙に行なわれる。加害者の攻撃があまりに巧妙なので、一つひとつのことをとってみればそれが暴力だとは言うことができないくらいだ。そのため、加害者が相手を精神的に破壊してしまっても、周りにいる人は夫婦の性格があわなかつたせいであるような不幸に状況になってしまったのだろうと考えてしまう。

モラル・ハラスメントの加害者は自己愛的な人間だという。それに対し、被害者は罪悪感を持ちやすいタイプの人間である。最初は加害者が相手を惹きつけることから始まる。そして、相手の精神を支配し、暴力をふるうといった経過になっていくのである。

相手を支配しておけば、相手が自分から離れていくこともない。自己愛的な人間にとって、自分に力があることを確認するには何も言わずにそれを認めてくれる人間が必要なのだ。そのためにも相手を自分に従属させ、さらに言えば相手を「所有」する関係を作ろうとする。そのやり方は巧妙で、特に最初のうちは言葉以外の態度や行動で相手の言動をそれとなく非難し、自分の思いどおりに操ろうとする。

例えば、こんなことをされたらどう感じるであろうか。

――夕食のときなど、何か話しかけると、相手は驚いたような顔で天井を見つめていた。

――仕事が上手いかないかとか、資金の問題があると言っているが、我慢できなくなって言い争いになる。苛立っているのは自分だけなので、相手は「君はまた僕を非難するつもりか。分かっているよ。君にとっては、みんな僕がいけないんだろう」と言う。

――話しかけても取り合ってくれないので、我慢しているが、我慢できなくなって言い争いになる。苛立っているのは自分だけなので、相手は「君はまた僕を非難するつもりか。分かっているよ。君にとっては、みんな僕がいけないんだろう」と言う。

巧妙に相手を無視し、相手の考えていることはおかしいのだというメッセージを伝えていることがわかるだろうか。そしてさらに、関係が悪くなったのは、自分のせいだと相手に罪悪感を持たせていくのだ。この支配の段階から暴力の段階へとモラル・ハラスメントは進んでいく。

また、職場でのモラル・ハラスメントとは、

言葉や態度、身ぶりや文書などによって、働く人間の人格や尊厳を傷つけたり、肉体的、精神的に傷を負

わせて、その人間が職場を辞めざるを得ない状況に追い込んだり、職場の雰囲気が悪くさせることである。職場におけるモラル・ハラスメントの歴史は、職業の歴史と同じくらい古い。だが、それがひとつの現象として注目されるようになったのはここ10年くらいのことである。⁽³⁾

と述べられている。

職場におけるモラル・ハラスメントは大きく二つのグループに分けられる。一つは、権力の乱用である。しかし、これは目に見える形であるため、ハラスメントを受ける社員の側は、その乱用を受け入れていない場合がある。もう一つが、陰湿なやり方で相手の心を傷つけるものであり、これは被害者に大きな打撃を与える。

モラル・ハラスメントは、どのような人に向けられるのかという疑問が生じる。被害者になってからは仕事を手につかなくなり、能力が低い人のように見えるかもしれないが、決して最初から能力が低かったわけではない。モラル・ハラスメントは、権威主義的な上司に反抗したり、その権威に服従するのを拒否したことを契機に始まることが多い。圧力に屈せず、権威に反抗するという被害者の能力が、加害者の支配欲をいたく傷つけるのだ。そのため逆恨みした加害者からの一方的な宣戦布告が始まってしまふのである。しかし、その戦いは決して表立って行なわれるものではない。暴力に先立って、被害者となる人の人間的価値を貶めることが徐々に進められる。大阪城を攻め落とすために、徳川側が外堀を埋めさせ、徐々に攻撃しやすくしていったのと同じ戦法といえよう。

ささいなミスを見つけ出しては、へあいつは仕事ができないう、へ性格がおかしいなどと被害者になる人を非難し始める。時間をかけた繰り返しによって、その非難は次第に周りの人間によって受け入れられ、支持されていく。そして、暴力が行なわれても異常と思われぬ土壌が作られた上で、次第に激しい暴力がふるわれていくのである。

モラル・ハラスメントの最大の特徴であり問題点は、被害者本人及び周りの人が、モラル・ハラスメントが行なわれているという認識をもてないように徐々に進行し、気がつけなくなっていることである。しかし実際には、被害者への残酷なまでの虐待がなされているわけであり、さらにその虐待は被害者本人が悪いからではないかと自分を責めてしまふという、何重もの苦しみを与えている。

さて、被害者を悪者だと思わせる手口である、相手を不安にさせる方法には次のようなものがある。

- 政治的な意見や趣味など、相手の考えを嘲弄し、確信をゆるがせる。
- 相手に言葉をかけない。
- 人前で笑いものにする。
- 他人の前で悪口を言う。
- 釈明する機会を奪う。
- 相手の欠陥をからかう。
- 不愉快なほのめかしをしておいて、それがどういふことが説明しない。
- 相手の判断力や決定に疑いをさしはさむ。⁽⁴⁾

八 ハラスメントへの対応

さて、モラル・ハラスメントを受けているとしたら、第一に必要なのは、モラル・ハラスメントの被害を受け

ているのだと認識することである。一人もしくは数人の人間から敵対的な態度をとられ、人間性の尊厳を損なわれていると感じたことはないだろうか。長期的にそのようなことが続き、誇りを傷つけられていると感じたとしたら、それはモラル・ハラスメントを受けているのである。

例えば、何の説明もなく給料が減額されたら大変な問題であろう。あるところでは、課長や部長だった人が人事異動で他の部門に移ったとたん、役職手当をカットされた。役職手当がなくなったのだからヒラ社員に降格になったのかと尋ねると、「そういうわけではないのですが……」と明確な回答をしない。上司に訴えても、人事の責任者に訴えても不明確なままだという。これは会社をあげてのモラル・ハラスメントになる。もちろん、その人事担当者や上司に悪意があったかどうかは不明であるが、当人に対しての待遇が大幅に悪化しているのである。そして、その理由を明確にできずに曖昧にしていることによって、当人に自分のアイデンティティをどのようにもつたらよいのか困惑させているわけで、モラル・ハラスメントの被害者を作り出しているのは明確である。

このように、人が集まり、特に競争関係にある集団ではさまざまな形態でのモラル・ハラスメントが存在している。現在の日本の社会では、企業と共に学校の問題は大きい。学校教育を取り巻く環境は、受験を競争にしたてて、成績で競争させ、成績で人を見ていく傾向を作り出している。大人社会がモラル・ハラスメントを増やしている影響を受けている上に、管理化・画一化をすすめるながらの競争を激化しているのが現在の学校なのであるから、モラル・ハラスメントが増加せざるを得なくなっている。モラル・ハラスメントの表れである「いじめ」は、悪質化、陰湿化の一途をたどり、被害者は苦しみ、自殺者も増加している。モラル・ハラスメントの被害者になり、「不登校」になっている児童・生徒もいるし、その学校の雰囲気になじめず「不登校」になっている子も

多いであろう。

誰かを攻撃してその人が自己に対して抱いているよいイメージを破壊することにかけては、人間の想像力はとどまるところを知らない。そうやって人間は自分の弱さを隠し、他人に対して優位な立場に立つとす

るのだ。

人が、他の人を攻撃することによって、自分の弱さを見る苦しさから抜け出し、他人よりも優位に立つとする傾向は本来的に備わっているのかもしれない。しかし、他人を犠牲にして、自分の一時の安楽さを求めることは決して許されてはならない。現在、あまりに多くの人が行なっているために、それが日常の普通のことと思われるような「他人を犠牲にすること」こそ、モラル・ハラスメントなのである。そして、そのような環境の中で、病的としかいいようのないモラル・ハラスメントが発生してくるのである。集団の成員の多くが同じ傾向をもっているからこそ、その異常性に気がつかない。しかし、モラル・ハラスメントを行なっている者の中には「自己愛的な変質者」が存在しているのだ。自分が他人を傷つけていることに対して、全く罪の意識を持たずに、さらに酷いことをしようとする、まさに、自分の優位性を証しするためだけに、他人を虐待する人がいるのだ。

そのような「自己愛的な変質者」が、自分の心のおもむくままに他人を攻撃し、傷つけることができるのは、モラル・ハラスメントを許す土壌があること、その土壌を私たち一人ひとりが作り出していることに目を向ける必要がある。自分が、他人の足を引っ張ってでも上にあがりたいたいという気持ちがあつたとしたら、モラル・ハラスメントが生じ始めたときに、その異常性に気がつくことができるであろう。私たちの心の中に潜む悪意、妬み、認められたい願望をしっかりと自覚して、それらの暴走をとどめる勇気をもちたいものである。

もし自分がモラル・ハラスメントの犠牲者になっていたら、第三者の目で判断できる人に助けを求める必要がある。モラル・ハラスメントを受けていることを証言してくれる人を見つけておく必要がある。そして、企業であればモラル・ハラスメントと戦う土壌がまだあるのかを見定めて、モラル・ハラスメントと戦う土壌があるのならばその相談に乗ることのできる人、産業カウンセラーや医師、などのところへ行くことである。しかし、モラル・ハラスメントがかなり進行していて、その中では対処できないならば、その環境から離れること、法的な措置をとることが必要となる。

モラル・ハラスメントを行なっている者は、相手が言いなりになるように時間をかけてダメージを負わせてきている。いじめは少しずつ酷くなっていくのだが、被害者は「このくらいは大丈夫だ」「これは自分が悪いから仕方ない」という抜け道のない考えに陥らされてしまっている。これは学校でのいじめと全く同じなのであるが、モラル・ハラスメントを行なっている者は、自分が安全だと確信しているから継続しているのだ。断固として「ノー」を言わなければ、モラル・ハラスメントはいつまでも続いていく。そのためには、法的な措置も早めにとる必要がある。

九 モラルの再生のために

人には、相手のことを共感して共に生きようとする気持ちもあるが、その正反対の相手を蹴落としてでも自分が優位に立ちたいという気持ちもある。

最近、親の言うことを聞く「いい子」の問題が取り上げられている。親の願うとおりの人間にならなかつたら生きてはいけないというメッセージを幼いときに身につけてきている子が「いい子」の中には存在しているというのだ。そのために、親に認めてもらえるような人になろうとして、他人よりも能力があつたり、他人の役に立つことで、他人よりも優位な自分になろうとする。そうなることができないと生きていく資格がないように感じてしまう人もいるというのだ。

たいていの人は、幼いときには神童か天才かと、親のひいき目からは見えたとしても、しょせんは親の子、成長すると共にたくさんの「できないこと」に遭遇して、普通の人になっていく。その挫折を認められずに、「今はだめでも、いつかきつと自分の本当の力を出して……」などと、現実逃避をしてヒーローを夢見ていると、できないという現実と理想とのギャップで苦しむことになり、そのギャップから次のような別れ道がひらかれる。①現実には立ち戻ってだめな自分を認めて生きる。②現実からかけ離れて妄想の世界に生きる。③夢を見続けるために他人を犠牲にしても自分の優位性を証ししながら生きる。

①は健全な生き方に立ち戻り、普通の人として生きること示している。挫折を受け止め、自分の限界を知ることがゆえに、努力して乗り越えていこうとする前向きの生き方が可能になる。②は、その妄想の程度がひどくなれば、現実生活では生きられなくなり、精神病になってしまう。③の生き方が、ここで問題となっている「自己愛的な変質者」である。自分の本当の姿を見ないために他人を踏み台にして、自分が優位であることを実感しようとするのである。

最近の傾向として、③の「自己愛的な変質者」が増えていることはまぎれもないことであろう。しかし、その自己愛的変質者は、表面上はその姿を明らかにしない。優しい人、思いやりのある人、常識のある人、大人しい人などの仮面を被っていて、そう簡単には馬脚を表さない。「いい人」を演じるのはもともと得意なのだ。しかし、仮面の裏の本性は、他人を人間として尊重する心など全くもっていない。自分の優位さを証しするための道

具としか見ることができないのだ。他人のことを、役に立たなくなれば捨てればいいし、使える間は徹底的に使えばいいと考えているかのようである。そして、ひとたび自己愛的な変質者としての本性を出して、モラル・ハラスメントを行ない始めると、相手を情け容赦なく虐待し、止まるところを知らない。

何度も言うが、この自己愛的変質者と同質のものを私たち一人ひとりも持っていることに目を向ける必要がある。自分たちの中に大なり小なり同じような傾向——他人を利用して、自分が優位であることを実感したいという欲望——をもっているから、その異常性に気がつかなくなってしまうのだ。その異常性が閉鎖的な社会で少しずつ進められるために、気づくのは一段と困難になっている。閉鎖的で小さな社会である、家庭、学校、企業などが、モラル・ハラスメントの温床になっているゆえんである。

私たちは、モラル・ハラスメントを決して許すことなく、一人ひとりの尊厳を大切にしたい社会の実現に向かいたいものである。そのために、異常性に気がつく感性を育てる必要がある。同時に、今の自分の生きている社会の常識を超えた見方をつねに心がけることが、密かに培われていく異常性をチェックするためには必要である。つまり、自分の家庭だけを知っていて、それが「当たり前」だと思っていると、異常性に気がつくのは難しい。他の家庭の状況を知ることが、自分の家庭の中で培われている異常性に気がつくために最も簡単で、確実な歩みとなる。それは、家庭だけではなく、学校でも、企業でも同じである。他のところの状況を知ることによって、自分のところの良さも、異常さも知ることができるのであるから、健全な発達のためには、他のところの状況を知る努力が必要なのである。同様に、自分のところの状況を表現することも大切である。表現することによってだけでも、今まで当たり前だと感じていたことを、違った感覚で見ることができる場合もある。さらには、表現したことによって、他の感覚を持った人からの反応が期待できる。これは、小さな社会・閉鎖的な社会のマイナ

ス面を克服し、それぞれが持っている独自性を長所として伸ばすために必要不可欠な努力といえよう。言い換えれば、どんな小さな集団であっても、積極的な交流、情報交換、開かれた集団へと向かうことが必要である理由がここにある。

それらの努力の上に、その成員一人ひとりの道徳性を高める可能性が大きく開けてくる。集団のあり方が開かれたものであるときに、その成員の生き方は、モラル・インテリジェンスを高めるための生き方である、共感に基づいた柔軟な生き方へと向かっていくと考えられるからである。

つまり、どんなことに対しても、すでに自分が持っている価値観で判断しようとする生き方は、自分の価値観とは異なったものを排除していることを示している。固定的価値観は、排他性、閉鎖性、同質性を生み出すわけで、実はこの傾向の中にこそ、モラル・ハラスメントが繁殖する危険性がある。モラル・ハラスメントの加害者は、じっくりと時間をかけて、被害者がどうしようもない人間だという烙印を押させてしまうのだ。集団の仲間の価値観を操作してしまう天才とも言えよう。その悪しき天才の才能を発揮してしまうのが、閉鎖的な環境なのだ。もし開放的な集団であれば、どんなに操作したとしても、次々に新しい刺激が入ってきて、モラル・ハラスメントの加害者の洗脳からすぐに目が醒めていくであろう。開かれた集団の中では、モラル・ハラスメントの加害者は、加害者としての本性を出す環境づくりができなくなってしまうのだ。

また、開かれた集団というのは、新たな状況に対しても、共感的に、すべての人が満足する状態を実現しようとすることを意味している。まさに、成員一人ひとりがモラル・インテリジェンスをフルに活用させた状態であり、それが開かれた集団を作り出している。このような場であるからこそ、モラル・インテリジェンスをさらに高めるための訓練の場になっているわけである。

私たちのモラル・インテリジェンスを高め、モラル・ハラスメントを一掃するためにも、私たちの身の回りを少しでも開かれた場へとしていく努力が必要であろう。自分自身には、さらにモラル・インテリジェンスを高めていく努力をし、環境的には開かれた集団にしていきたい努力をしていくことが期待される。そこにこそ、これからのモラルが形を現す可能性があるのではないだろうか。

〈註〉

- (1) アーロン・ハス著、橋本恵訳、二〇〇〇年、『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第二の能力』株式会社DHC、一四ページ
- (2) タニエル・ゴールマン著、土屋京子訳、一九九六年、『EQ——心の知能指数』講談社
- (3) アーロン・ハス著、橋本恵訳、二〇〇〇年、『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第二の能力』株式会社DHC、一七ページ
- (4) アーロン・ハス著、橋本恵訳、二〇〇〇年、『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第二の能力』株式会社DHC、四五ページ
- (5) アーロン・ハス著、橋本恵訳、二〇〇〇年、『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第二の能力』株式会社DHC、一七～二三ページ
- (6) アーロン・ハス著、橋本恵訳、二〇〇〇年、『モラル・インテリジェンス——カオス社会を生き抜く第三の能力』株式会社DHC、八四ページ
- (7) マリー・フランソワ・イルゴイエンヌ著、高野優訳、一九九九年、『モラル・ハラスメント』紀伊国屋書店、三六ページ
- (8) マリー・フランソワ・イルゴイエンヌ著、高野優訳、一九九九年、『モラル・ハラスメント』紀伊国屋書店、一〇二ページ
- (9) マリー・フランソワ・イルゴイエンヌ著、高野優訳、一九九九年、『モラル・ハラスメント』紀伊国屋書店、一八二ページ
- (10) マリー・フランソワ・イルゴイエンヌ著、高野優訳、一九九九年、『モラル・ハラスメント』紀伊国屋書店、三一五ページ